

はじめに

道徳的価値に関する課題追求への意識を高める学習指導において、大切にすべきことを次の三点から整理したい。単元構成上の工夫、道徳の時間における課題設定上の工夫、課題追求上の工夫の三つである。

新しい教育課程の実践に向けて、自ら学び自ら考えるという観点から、順にその考え方の具体を述べた後、特徴的な実践を紹介する。

一 単元構成上の工夫

1 意図的に実生活との関連を図る

子供が設定する課題は、まさに子供一人一人の課題でなければならない。教師や全体の共通課題が、その子供の課題となるためには、その子自身の生活や感じ方に位置付かなければならない。そのためには、扱う道徳的価値にかかわる生活場面を意図的

に関連づける工夫が必要である。低学年で家庭愛を扱うとき、生活科との横断的な単元を仕組み、お手伝いなどを継続して行うなどの関連を図るようにである。

2 事前に体験的な活動を仕組む

子供の生活場面にいつも道徳的価値に関連する活動があるとは限らない。その場合には、意図的に象徴的体験的な活動を事前に仕組む。その活動の中で子供たちは、自分なりの疑問や迷い不安、喜びや充実感などを持つ。そのことが、道徳の時間に納得や実感を持って課題を設定することを可能にする。

この二つは、課題追求の意識を高めるための前提といってもよい。

二 課題設定上の工夫

1 寄り添いやすい資料を作成する

子供が寄り添いやすい場面や心情が描かれた資料を選択したり、作成したりすることは、課題追求の意識を高める。そのため

には、事前の体験や子供の日常生活をよく観察し、子供の感じ方を十分分析しておくことが必要となろう。

2 受容的な雰囲気をつくる

子供は提示される資料の場面場面を、自分なりに反応しながら受け止める。心の中で主人公を非難したり、反対に応援したり、また、主人公と同じように迷ったり。資料提示中の子供たちのつぶやきや自然な反応を促したり、価値づけたりすることが子供一人一人の独自の課題設定を確かにする。子供が資料に対して開放されていたり、一人一人の受け止めが子供たち相互に認められていたりするなどの受容的な雰囲気をつくる必要がある。

3 考えたい場面の選択を促す

自分なりに納得した課題を設定することができるようになるためには、扱う場面を一つに絞らないで、二つ、あるいは三つ程度設定することが有効である。

授業に主体的に取り組もうとする子供は、自分が最も関心のある場面から課題を設定

して学習を進めようとするからである。

設定する場面は、扱う道徳的価値が登場人物によって、十分実現されている場面、不十分にしか実現されていない場面、また、どちらとも言えない葛藤の場面がよい。通常は葛藤の場面のみを扱うことが多いが、子供によっては、価値実現のすがすがしさやよさに共感して資料を受け止めることもあるし、逆に価値が不十分にしか実現されていない場面の主人公への批判を通して学習を進めたい場合もあるだろう。そのような多様な受け止めを認め、促すことによって、追求意識は高まる。

三 課題追求上の工夫

1 課題解決にふさわしい表現を促す

一人一人の設定する課題が二、三ある場合、その課題を解決するための活動は必ずしも同じにはならない。

書く活動だけを取り上げても、その方法は課題によって多様であろう。例えば、主

人公の不十分な行動に対して憤りなどを感じている子供は、主人公と鉛筆対談をして、主人公の行為の不十分さを指摘しながら自らの道徳的価値観を深めていくであろうし、主人公の強い葛藤の場面を選択した子供は、主人公に寄り添って、吹き出しなどで共感的に心情を想像するであろう。時には、続き物語を作ったりシナリオを作ったりしながら心情を深めるのもよいであろう。

このように価値追求における表現方法の多様化を促すことは、追求意欲をかき立て、少しずつ表現方法を身につけさせながら、次第に学び方を開いていくことが大切なのは言うまでもない。

2 課題解決にふさわしい活動を準備する

書く活動の多様さだけでなく、活動そのものを多様にすることも有効である。

例えば、主人公の気持ちを想像するために主人公と同じような活動を擬似的に体験するなどは広く行われるようになった。車椅子体験やブラインドウォーク、点字を打つ体験、高齢者疑似体験などである。その

他ロールプレイや劇化など、体を動かす実感を伴った活動がふさわしい。

3 グループによる追求を促す

課題別のグループや表現・活動別のグループによる追求の場を設定する。

同じ場面で考えている子供たち同士で、例えば、「おもいやり」であればその具体的行為についての考えを交流し深めるなどの場を設定する。活動別のグループ交流も同様に有効である。その後、全体での話し合いを行うと効果的が上がる。

四 実践事例1 「若い・病と向き合う」

総合的な学習との関連と場面選択によって課題追求の意識を高めた六年の事例である。総合学習で老人福祉施設に四回訪問し、繰り返しお年寄りとかかわりながら介護体験をする学習に、道徳の時間を関連づけた。リハビリ運動の介助、食事の介助、シーツ交換、入浴のお世話など十分な事前の体験活動が道徳の時間の課題追求を切実なも

のにした。

訪問の初期に行った道徳の時間1では、高齢者疑似体験でお年寄りのからだの状態を疑似体験して、お年寄りに対する接し方について考えた。

道徳の時間3においては、介護活動の中で子供たちが持つであろう不安や悩みを取り上げて資料化した。その場面は三つである。①主人公がはじめの頃おばあちゃんとすんなり手をつなげなくて悩んでいる場面、②食事の介助をするのだけどなかなか食べてもらえなくて悲しい気持ちになっている場面、そして、③リハビリのゲームと一緒に楽しめていない場面である。子供たちだれもがこのどれかの悩みを体験していると考えたからである。また、どの場面を選択してもお年寄りとの接し方、思いやりについての考えを深めることができる。また、表現方法は一つにして、選択した場面ごとに主人公にアドバイスをするという方法で一人一人の考えを深めることにした。選んだ場面ごとにグループになり自分なりのア

ドバイスの内容を交流することを通して、「思いやり」についての思いを深めた。

事前の疑似体験については、附属光小学校の上妻教官の実践「支え合って」における目隠しをして歩いたり走ったりする活動も確かな追求を支えた。次のウェブページ <http://www.hikari-es.yamaguchi-u.ac.jp/html/kyoka/dotoku/sasaente.htm> に詳しい。

五 実践事例2 「クリーン作戦」

道徳の時間において場面選択を促すと共に表現方法を複数設定した二年生の事例である。用いた資料は、「公園のそうじ」（大阪書籍）である。設定した場面は、主人公やすこが①自分のおやつのゴミを捨ててしまった場面、②おばあさんのなげきを聞き、自分もそうじをしようかどうか迷っている場面、③友だちと一緒にそうじをし終わってとてもいい気持ちになっている場面の三つである。表現方法として提示したのは、①主人公との紙上で対話をする「鉛筆対談」、②主人公の心情を想像する「吹き出し」、③主人公の行為の善悪を目盛りで示

しその理由を付記する「道徳目盛り」の三つである。子供たちは、自分の体験をもとに、最も関心の深い場面を課題として選択して、「公德」についての考えを確かにしていく。

例えば、③の価値実現の場面を選択して主人公と紙上で対談をした子供は、(自分)「やすこちゃん、公園のそうじをして気持ちよくなったでしょう。わたしも同じように公園のそうじをしたことがあるよ」(やすこ)「人のために働くこんな気持ちがいいとは思わなかったな。前、ゴミを捨てていた自分が恥ずかしいな。今度からは、進んで公園をきれいにしたい。」など、人のために公共の場をきれいにすることのよさを感じる事ができた。

また、①のゴミを捨てる場面を選択した子供で、道徳目盛りを用いたものは、その行為を×とし否定しつつ、理由には、「自分もしたことがあるが、やってはいけないこと」と自らの行為を振り返り、あるべき姿を述べる。

このように、自分が最も関心を寄せる場面を自分なりに表現しやすい方法で追求することによって、よりよい問題解決を図ることができる考える。

おわりに

以上私が普段行っている道徳学習を「課題追求の意識を高める」という視点から授業前、授業前半を中心に整理し直した。

その他、課題追求の意識を高めるためには、授業の終わりに、自らが設定した課題を仲間と共に解決することができたという成就感や達成感を味わせると共に、それをクラス全体で喜び合うということも大切である。そのことは、次の道徳の時間においても、さらに確かな課題追求をしようとする意欲を高める。また、自らの課題追求において何がよかったのかをメタ認知するなどの振り返り活動を活性化することも重要である。

最後に、私の道徳の授業実践を中心に、

総合的な学習の時間などの記録を次のウェブページにまとめている。一度ご覧いただけると幸いである。

http://www.ymg-es.yamaguchi-u.ac.jp/sakamoto/sakamoto_index.htm

(さかもと つつひこ)